



手紙

～いつか娘に会える日のために～

© ICRC

レバノンの首都ベイルートにある公立大学病院のラフィックハリリ病院。

赤十字国際委員会(ICRC)が同院内に設置した病棟に派遣されている私は、病棟看護師としてシリア難民やパレスチナ難民を対象にした医療支援に従事しています。

ある日のことです。男性の患者さんが書き物をしていたので声をかけると、「今日は娘の誕生日。いつか会えた時に渡せるよう、娘に手紙を書いているんだ」と言いながら、幸せそうな家族の写真を見せてくれました。

シリアで弁護士をしていた彼は内戦後、反体制派から命を狙われたことで、取るものも取りあえず国外へ避難したそうです。家族も呼び寄せる予定でしたが、彼の住んでいた地域は反体制派の統治下となり、家族の国外脱出は困難に。連絡を取ることもできないまま5年が経過してしまいました。

その間に持病の糖尿病が悪化し、左足を切断、右足も全ての指を失いました。それでも「必ず元気になって仕事に戻り、家族と一緒に生活できると信じている」と気丈に振る舞います。娘さんへの手紙を読んでもらうと、そこには父としての思いが溢れ、涙せずにはいられませんでした。両親にあまり連絡していない私を、ときに彼は茶目っ気たっぷりに、「Bad daughter=悪い娘」と呼びます。少しでも早くシリアの情勢が落ち着き、みんなが元の生活に戻れることを願いつつ、私にできる唯一のこと、適切で心のこもった看護を提供するよう心掛けています。

シリア難民救援 レバノン 病院支援事業 看護師 関塚 美穂



日本赤十字社 名古屋第二赤十字病院  
Japanese Red Cross Society